

## 野生動物研究領域

野生動物研究領域長 北原 英治

野生動物研究領域は、森林域に生息する野生動物を広く研究対象としているものの、希少・固有種を担当するチーム長と鳥獣生態研究室からなる小さな組織です。幸い、平成4年に関西支所に、その後平成9年には九州支所に研究室（現在はグループ）が出来て、北海道から九州までの全国的な研究展開が可能な態勢を有しています。

わが国では、亜寒帯から温帯・亜熱帯性の気候条件の下に極めて多様な森林が広がっています。また、それと関連して日本列島の地理的な配置や地史的条件により野生動物の固有種も豊富です。一方、戦後の拡大造林などによる人工林の増加と天然林の減少が急速に進み、人工林における野生動物による被害問題が深刻になるとともに、各地域で生息分布が分断・孤立化した個体群の保全も喫緊の課題となっています。そのため、領域では野生動物における生物学的多様性の保全と生物被害回避に関する研究を行っています。

まず前者では、希少・固有種を中心に個体群の存続に影響を与える森林施業、ランドスケープ構造の変化、狩猟・採集、外来動物の分布拡大などの要因を生息実態の解析と遺伝的な多様性を評価することで抽出して、希少・固有野生動物の保全手法の開発を目指しています。具体的には、固有種でありながら狩猟の対象種とされているヤマドリ、最近各地で定着している森林性外来鳥類のチメドリ科（ソウシチョウ、ガビチョウなど）、西日本では希少種とされるニホンリス、特別天然記念物のアマミノクロウサギ、一部地域では被害問題をも引き起こしているニホンカモシカとツキノワグマなどを対象としています。

つぎに生物被害の回避に関する研究では、制度化された特定鳥獣保護管理計画をスムーズに施行させるためニホンジカの個体群推移モデルを開発して、広く府県に普及しています。また、保護管理計画の基準となる適正密度の検証をニホンジカの生態的特性を基に重点的に行っています。さらに、最近、社会的にも関心の高いダイオキシンなど内分泌攪乱物質の生態系への影響について、食物連鎖の段階別における生物濃縮過程の実態解明の観点から、取り組んでいます。

生物学的多様性の保全研究も被害回避のための研究も野生動物の研究分野では森林管理のあり方を軸に基本的には同一の線上にあります。今後も野生動物の保全を考慮した森林管理にその科学的根拠を与える研究展開を図って行きたいと考えています。



写真. 全国的に深刻な農林業被害を引き起こしているニホンジカ